

【岡山】双方向型のゲノム医療啓発が好評「学校教育でも取り上げて」-十川麗美・岡山大学病院 認定遺伝カウンセラーに聞く◆Vol.2

2023年2月24日（金）配信 m3.com地域版

進歩するゲノム医療の認知度向上を目指し、2019年に啓発プロジェクトを立ち上げて活動する認定遺伝カウンセラーの十川麗美氏（岡山大学病院）。県内外で行ってきた活動は病院や団体からの評価を受けており、「将来は学校教育にも取り入れてほしい」と話す。活動を始めた経緯やプロジェクトの内容、イベント運営の工夫を聞いた。（2023年1月31日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



十川麗美氏（本人提供）

——十川さんは、「ゲノム医療をもっと一般の人に知ってもらいたい」と地域に向けた活動も行っていますね。

認定遺伝カウンセラーの資格を取得して岡山大学病院に就職した2019年、「Genetic Cafe（ジェネティックカフェ）」というプロジェクトを立ち上げました。院内業務に携わる傍ら、大規模科学イベント「サイエンスアゴラ」や岡山県で行われている生涯学習講座「吉備創生カレッジ」などに参加し、がんゲノムについて一般の方にお話ししてきました。私が一方的に解説するのではなく、参加者の考えや質問を聞き、グループディスカッションなどもしながら交流する「双方向型」の活動になるよう心がけています。

私は現在、就職前に学んでいた京都大学大学院で「市民啓発」をテーマに研究もしており、日本学術振興会の科研費（科学研究費補助金）などを活用してこのプロジェクトを運営しています。プロジェクトで得られた知見やデータを研究に生かしています。

——こうしたテーマで地域活動を行っている医療者は少ないと思います。学生時代から教育や啓発に関心があったそうですが、活動の端緒は。

山口大学4年の2016年に参加したサイエンスアゴラでの体験が大きかったですね。このときは同大時間学研究所のブース出展をスタッフとして手伝ったのですが、参加者と特定のテーマについて話し合い、互いに刺激を感じ合うのが楽しくて。双方向型のイベントだと、参加者がどんなことに関心や疑問を持っているか知れますし、それに合わせてこちらもその人に伝わりやすいよう話す内容や表現を調整できます。「こんな交流型のイベントを遺伝をテーマにやりたいな」と思うようになりました。

——ジェネティックカフェのホームページを見ると、十川さんが企画・制作したマンガも活用しているとか。

がんゲノムに限りませんが、医療に難しい印象を持つ人は多いと思うので、「なるべく分かりやすい表現で」と考えています。これは大学院のころから意識しており、マンガを教材にする有用性を調査して一定の効果を確認したので制作を進めました。市民の意見も聞きつつブラッシュアップを重ね、2018年に二十数ページの作品が完成。患者さんやご家族などのクライアント、イベントの参加者に配っています。

——がんがテーマに含まれることから、イベント参加者の心理面への配慮も必要になりそうです。

その意味で、過去に出展した日本学術振興会主催の「ひらめき☆ときめきサイエンス」では、事前に動画を流して概要をつかんでもらい、同意した人だけに参加していただきました。ほかのイベントでも、参加者の近くにスタッフを配置してすぐに声をかけやすいようにしています。がんを抱える人が身近にいるなど、参加者の中には話を聞き続けるのが負担になる人もいると思うので、事前に概要をアナウンスしたり、退席しやすい環境をつくったりすることは大切だと思います。

お話しする際は、参加者が遺伝についてどんなイメージや考えを持っているか聞き、それに合わせて内容や表現を調整しています。また、院内でのカウンセリングの場では、こちらの感情や主観を押し付けないことも大切だと考えています。

例えば、病気の原因に遺伝が関わっていることが分かった場合、「残念ながら遺伝性です」と伝えるとどうでしょうか。「残念ながら」という言葉にクライアントが影響を受け、結果にネガティブな印象を持つ可能性があります。結果そのものをクライアントが残念に思ったり不安に感じたりしていればそういった気持ちが生まれた過程を整理していく必要がありますが、それとは別に私たちの発言がクライアントの心持ちに影響を与えてしまう可能性があることには十分に留意しないとはいけません。

——ジェネティックカフェ立ち上げから約4年経ちます。手応えは。

ゲノム医療の進歩に伴ってか、当院の「臨床遺伝子診療科」や「認定遺伝カウンセラー」という言葉に興味を覚え、イベントに参加される方が増えてきたように思います。イベントが終わった後、「遺伝に興味があった」「認定遺伝カウンセラーのことは知らなかったけど、必要なときは相談したい」などの感想が聞かれることもあり、うれしいですね。

——十川さんの院内外での活動は2022年、同院や一般社団法人「日本サイエンスコミュニケーション協会」から評価され、それぞれ賞を受けました。今後の展望をお聞かせください。

将来的に、ゲノム医療を学校教育で取り上げていただきたいと考えています。人々にこういった医療があることをどこかのタイミングで知っていただきたいですし、そうであれば子どものころから学ぶ機会があると良いのではないのでしょうか。その意味では現在、岡山大学教育学部でも講義する機会をいただいております。今後は地域でも学校の先生など教育者に向けて情報発信していきたいです。

ゲノム医療はここ10年で急速に進歩しており、患者さんの遺伝子の特徴が分かることによって効果が見込める治療薬が分かることがあります。まずは遺伝情報を活用する意義を知っていただき、そのうえで自分の情報を知るか知らないままでいるか、また知ったとして活用するかしないかを検討・選択していただくと良いのではないのでしょうか。

◆十川 麗美（そがわ・れいみ）氏

2017年に山口大学理学部を卒業後、2019年に京都大学大学院の認定遺伝カウンセラー養成コースを修了し、資格を取得。同年から岡山大学病院臨床遺伝子診療科に在籍。ゲノム医療を一般に啓発するプロジェクト「Genetic Cafe」の代表も務める。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

